おごそかな渇き

山本周五郎

おごそかな渇き

山本周五郎

新潮社版

© by Kin Shimizu.
Printed in Japan
1967

河盛好蔵
奥野健男　監修
土岐雄三

おごそかな渇き（山本周五郎小説全集33）
昭和四十二年十月二十五日印刷
昭和四十二年十月三十日発行

定価四五〇円

著　者　山本周五郎
著作権者　清水きん
発行者　佐藤亮一
印刷所　三晃印刷株式会社
製本所　神田・加藤製本所
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(260)一一一一(大代表)
振替東京八〇八番

乱丁・落丁本はお取替えいたします

目

次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

滝口……七
醜聞……八五
ひとごろし……一三
へちまの木……一五九
あとのない仮名……二〇九
朽落し……二七五
おごそかな渇き……三二七

おごそかな渇き

滝

口

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一

益村安宅が釣りをしていると、畠中辰樹が来て「釣れたか」と云った。益村は振り向きもしなかったが、声を聞いて畠中だということはわかった。益村は返辞をせず、畠中はその脇に腰をおろした。七月のよく晴れたひるさがりだが、うしろの崖に樹の茂みがあり、二人のいるところは日蔭になっているうえ、川から吹いて来る風があるので、少しも暑さは感じられなかった。

「なにか用でもあるのか」と益村がきいた。

「べつに」と畠中が答えた、「たぶんここだろうと思ったんでね」

益村はゆっくりと頭をめぐらせて畠中の顔を見た。それからまた釣竿の先へ眼を戻した。畠中は話があって来たのだ。城下から一里半ちかくもあるこんな山の中へ、用もなしにやって来るわけがない。そして、その話の内容も益村には察しがついた。料亭「衣笠」のおりうとの噂が耳にはいり、その意見をしに来たのだろう、そう思ったけれども、益村はなにも云わなかった。

「少しは釣れたのか」と畠中がきいた。

益村は脇に置いてある、乾いたままの魚籠を指さし、頭を左右に振った。

「それでも面白いのかい」

「この川は十洲川ともいうんだ」と益村は眼の前の流れをみつめながら云った、「——正確に数えると洲は十三ある、ここから三十町ほど上で始まって、川下の滝のところまでにな、——水はその洲の一つ一つにぶつかって分れ、また一つに合流し、そしてまた二つに分れる」

「豊水期にもこれらの洲は冠水することなく」と畠中が暗誦するように続けた、「またその数の増減する例もなし、これ珂知川のふしぎの一とす、——平州地誌に書いてあるさ」

「釣れても釣れなくっても」と益村は問いに答えた、「こんなことはかくべつ面白いものじゃないさ」

畠中は黙っていたが、やがて水面を指さし、引いているぞと云った。けれども益村には聞えたようすがないので、もういちど「引いているよ」と注意した。

「魚じゃないさ」と益村は答えた。

「浮子を見ろよ」

「鉤がなにかにひっかかったんだろう」益村はそう云った、「心配するな、餌のない鉤に魚はくいつきゃあしないから」

畠中は眼をみはって益村の顔を見、すぐにその眼を細めた。むっとしたのだろう、なにか云い返そうとして、二三度その唇をむずむずさせたが、思い直したようすで、逆に皮肉な微笑をうかべた。

「なにか困ったことでもあるんだな」

「あの木を知っているか」と云って益村は対岸のほうへ顎をしゃくった、「あそこに大きな濃い緑の木があるだろう、葉の表はひどく濃い緑だが、裏は白いんだ、そら、——風が吹きあげて葉裏が返ると、ぜんぶの枝に白い花が咲いたようにみえるだろう」

「だからどうした」
「頭のめぐりの悪い男だ」
「なにをそんなに悩んでるんだ」と畠中は励ますような口ぶりで云った、「――もうはらをきめてもいいころじゃないか、なにか故障でもあるのか」
　ははあそうか、と益村安宅は思った。彼はその話で来たのか、それはそれは、と心の中で呟き、あのことでなかったのは幸いだ、と緊張した気分をゆるめた。
「益村はおれとおないどしだから、もう三十一だろう」
「おれのほうが半年はやく生れた筈だ」
「しかも、お梶さんが亡くなってもう三年にもなるのに、まだみれんが残ってるのか」と畠中は調子をやわらげて云った、「杉原の波世さんだってもう二十二だ、理由もなしにいつまでも待たせてはおけないじゃないか、そうだろう」
　おれの母は二十五で父と結婚した、二十二だからってそういそぐこともないさ。益村はそう思ったが、やはり口にはださなかった。
「あの洲を見るたびに」益村は川上のほうを見やりながら云った、「――ここへ来て、この川の水とあの洲を見るたびに、おれはいつも人と人との関係を連想する」
「またはぐらかすのか」
「まあ聞けよ」と益村は続けた、「友人でも夫婦でもいい、心と心がぴったり合っているかと思うと、川の水が洲にぶっつかったように、なにかの拍子でふっと、身も心もはなればなれになってしまう、それがいつかまた、洲のうしろで水が合流するように、しぜんと双方からよりあい、愛情や信頼をとり戻すが、やがてまた次の洲にぶっつかって分れ分れになる、――この川の洲は

十三しかないけれども、人間の一生には数えきれないほどの洲がある、とね」
畠中はちょっとまをおいて云った、「益村には昔から、そういう思わせぶりなことを云う癖があった、よくない癖だ」
「家風でね、祖父もそうだったし、父もこんなふうだったよ」
「代々の留守役ということか」
益村は肩をすくめた。
「留守役は一般の勤めかたとは違う」と畠中が続けた、「——他藩との折衝が多く、それには政治的なかけひきが付きものだし、ときには幕府の重職とも交渉に当らなければならない、話術にも特別な技巧が必要だろうし、酒席の設けかたにはむずかしい按配があるそうだ」
「けれども」とひと息ついて畠中は云った、「それが留守役に欠くことのできない資格ではない、鶴井家は同じ留守役でも不粋ぶこつで知られている。当代の清左どのは一滴の酒も飲めず、酒席のとりもちは粗忽だらけだというではないか、しかもこれまでに、役目のことで失策したという例は聞いたためしがない」
「名臣伝にでものせるか」と益村が気のぬけた調子でさえぎった、「——本当のところ、畠中はなんの用があって来たんだ」
「おれは江戸へゆくことになった」
益村は振り向いて畠中を見た。
「川普請が難こうしていることは聞いたろうが、資金の調達がこっちではどうにもならなくなった」と畠中が云った、「——それで殿が御在府ちゅうに、なんとしてでも纏めようということになり、おれにその役が当ったというわけなんだ」

「鶴井を褒めるわけがそれでわかった」と云って益村は唇で笑った、「これは冗談だが、――しかしそいつはたいへんだな、幕府では財政緊縮でこちこちになってるそうじゃないか、殿も汗をかかれるだろうが、鶴井はそれこそ骨を削るぞ」

去年、酒井氏が側用人から老中に就任して以来、幕府は一般への倹約令とともに、財政のきびしい緊縮策がとられることになった。大名諸侯の中には、領内の土木、治水、農地開拓、産工業を興すなどのために、幕府から融資を受けていたものが少なくないので、この緊縮策は相当な打撃であり、それらの事業を縮小するか、中止、または放棄しなければならない例さえ出ているということだ。――江戸屋敷はもとより、国許の重臣たちもそれは知っているだろうし、承知のうえで融資を願い出るのであろう。珂知川の中流は俗に「宇木野」といわれる広い平野で、この藩の主要な米産地になっているが、古くからしばしば川が氾濫して農地を荒した。三十数年まえに川普請をし、三つの水門と堤防を築いて、大きな災害はいちおうくいとめたが、それらも近年になって、改修につぐ改修に追われながら、三年続いて堤防が崩れ、もはや根本的に工事のやり直しをしなければならなくなり、去年の秋から、新らしい方法による川普請にかかっていた。――幕府でも治水には特例を認めるというから、こんどの願いもあながち拒絶されるとはきまっていないが、要求するだけの融資がどの程度まで確保できるか疑わしいし、承認を取るだけでも、よほどの忍耐力と巧みな説得技術が必要だろう。おれが留守役でなくってよかった、益村はそう思い、心の中で安堵の太息をついた。

「江戸のことを心配するより」と畠中は云っていた、「おれが帰って来るまで身を慎んでくれ、それともう一つ、杉原との縁談のはらをきめておいてくれ」

「身を慎めだって」

「だいぶ噂が弘まっているぞ」と云って畠中はすぐに調子を変え、また水面を指さした、「――あれをなんとかしろよ、浮子があんなふうに出たり引込んだりしていると、魚がくっているようでおちつかないじゃないか」

益村は訝しそうに反問した、「畠中はそこでおちつくつもりなのか」

「返辞によってはね」

「それはかたじけない」

益村はゆっくり釣竿をあげて、上のほうへ糸を投げた。畠中はまたなにか云いかけたが、思い返したようすで、水面をくだって来る浮子に眼をやり、その動きを仔細ありげに眼で追った。

「ときに、出立はいつだ」と益村がきいた。

「二三日うちだろう、十五日までには立つ筈だ」

「別宴でもやるか」

「まさか」と云って畠中はじっと益村の眼をみつめた、「――衣笠ではないだろうな」

「酒というものはうまいものじゃないな」と益村はまた竿をあげ、上のほうへ糸を投げてから云った、「五つのときじいさまに飲まされてこのかた、今日まで一度もうまいと思ったことがなかった、――畠中はたぶん」

「兼しげさ、云うまでもない、別宴をやってくれるなら南小町の兼しげだよ」

益村は憐れむように唇を曲げ、かすかに左右へ振った、「救いがたき男だ」

「衣笠はごめんだからな」と云って畠中は慌てて水面の浮子を指さし、「おい、くってる」と云いかけたが、すぐに気づいて、憤然と口をつぐんだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com